

菊舎尼の寛政五年信濃訪問の新事実

矢羽 勝幸

一 旅行家菊舎尼

女性が今日のように遠隔地まで自由に旅行できるようになったのは、いったいいつ頃からであろうか。

近年ハ婦人行脚折々御坐候。ちかき頃九州天草ノ婦人年も三十五才立寄被申候。山田表（伊勢山田）より大湊羅城（名古屋の俳僧）風僧被成御坐候砌摺もの出来

行秋やわれはおどろく旅まくら

天草 芝玉

誠ニ聖代と被存候。併、婦人之胆玉思ひやられ候。

右の文章は、文化元年一月伊勢松坂の俳人増野屋五蓬が、信州上田の成沢雲帯に宛てた手紙の一節である。^{（註1）}九州天草の女流俳人が遠く伊勢にまで遊吟している事実を報告し、このような現象は近年折々みかけ、まさに將軍家の平和政策のおかげであるとまで述べている。文中「折々御坐候」と記すもののわざわざ手紙に報告し「婦人之胆玉思ひやられ候」と驚嘆しているのだから、文化元年当時やはり女性の遊歴者は珍しかったのであろう。

女性の行脚俳人といえ、まず指を屈せられるのは長門の田上菊舎尼（一七五三—一八二六）であろう。およそ一茶と同時代に活躍した人で本名は田上道、^{（註2）}長門豊浦郡田耕村の人である。明和五年

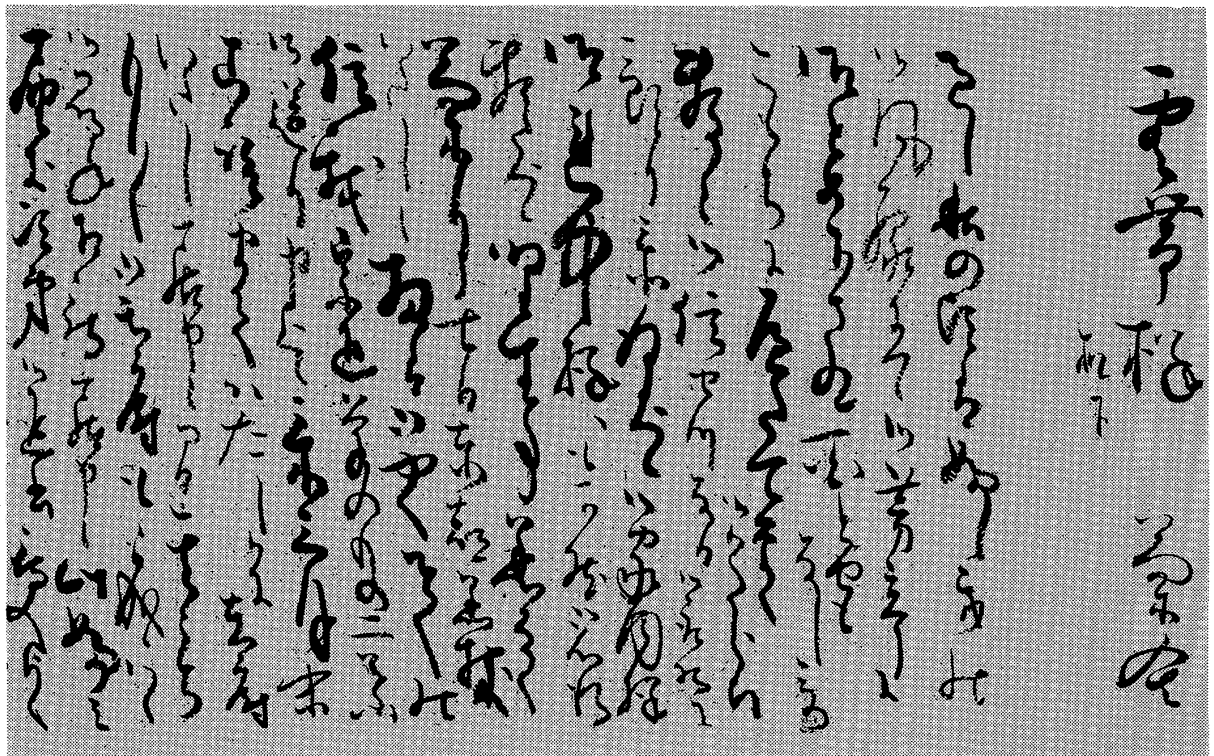
（一七六八）十六歳で同村の村田家に嫁したが、八年後夫と死別、やむなく実家に帰り、生涯文事に遊んで、諸国を遊歴した。宇治黄檗山万福寺で詠んだ。

山門を出れば日本ぞ茶摘うた

は、いま同寺の境内に建碑されているが、誰もが知る彼女の代表作である。俳系は美濃派の傘狂門で、全体に作風が低調なのはその流派によるところが多く彼女の責任ではない。

初めて大旅行に出たのは安永九年（一七八〇）、二十八歳の折のことである。著『手折菊』によると近畿、北陸、信濃、奥羽、関東を巡り、四年後の天明四年（一七八四）末に帰郷している。旅立つてまもなく萩の清光寺で剃髪したのは、仏道への帰依というよりは旅の便宜を考慮したものであろう。彼女の容貌は川田順氏によると「どうも美婦といふのではないらしく、むしろ男性的な凛とした容貌の持主」であつたらしいが、それにしても三十路に達しない女性が当時四年余も諸国を旅行することは容易なことではなかったであろう。安永九年は、先の五蓬書簡より溯ること四半世紀の昔である。

菊舎尼の名は近世の女性史等には必ず登場するもののその伝記や作品研究はほとんど進んでいない。川田順氏の『菊舎尼俳句全集』



(昭和十二年七月刊。沙羅書店) も全集と銘打っているものの二部の稿本『手折菊』『残菊集』を翻刻するのみで註すらつていない。伝記的には川島つゆ氏の『女流俳人』(昭和三十三年十一月刊。明治書院)がやや詳しく参考になるが、それも現地資料や当時の諸俳書を精密に当った形跡はない。その他二、三の女性史、女流俳人の関係書はあるが皆評論風にお茶をにごしている。菊舎尼の活動した化政期はそんなに昔のことではなく、少し心がければ資料は相応に集まるはずである。

平成六年夏、上田市原町の旧家成沢家の俳諧資料を整理中菊舎尼に関する二通の書簡を見出した。^(註3)一通は菊舎尼本人の自筆、もう一通は同系の江戸俳人野村白寿坊のものである。いずれも成沢家の当主七郎左衛門(俳号雲帯)に宛てたもので菊舎尼の伝記上いまだ知られざる新事実が記されていた。まずその二通の書簡を紹介しよう。

二 菊舎尼・白寿坊書簡

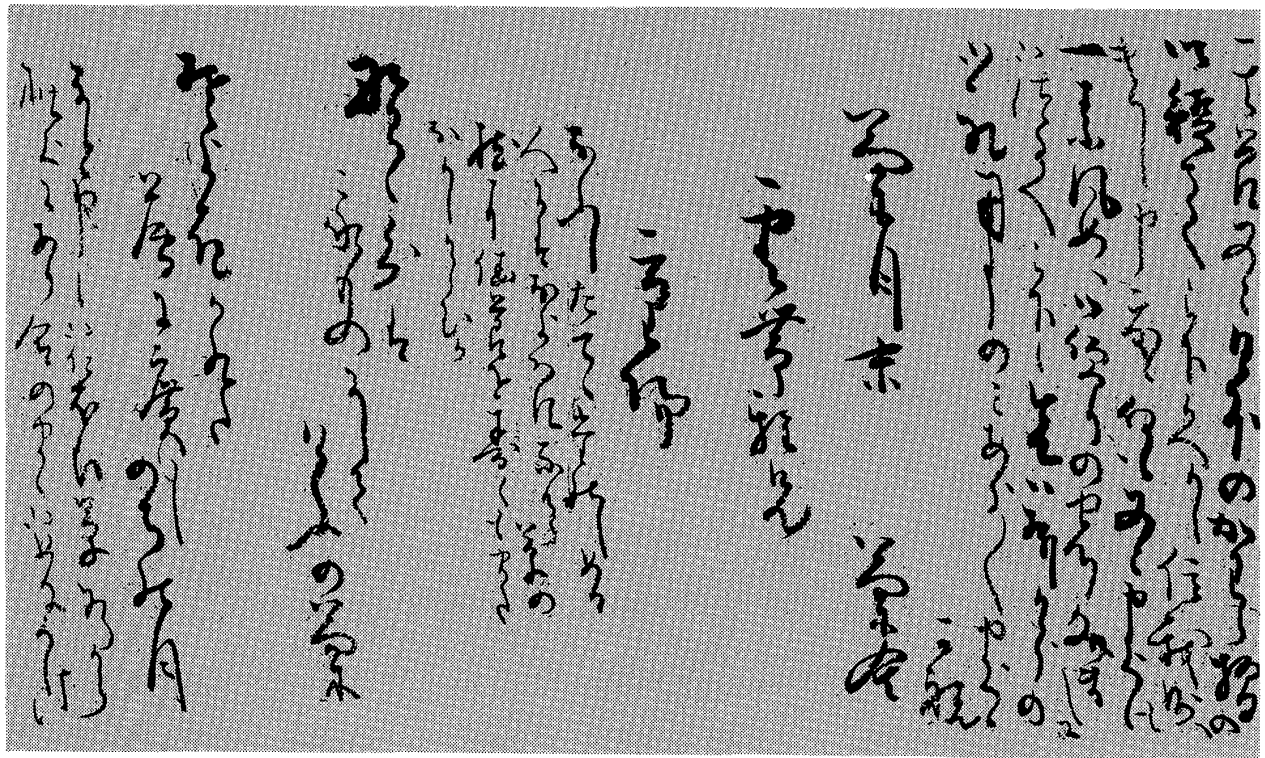
A 菊舎尼書簡

雲帯様

机下

菊舎

過し秋の頃はふしきの御風縁にて御芳亭に御とめ下され、百とセもなしミのこゝちにへたてなく御かたらひ数々御信セツなる御取持に預り忝存上候。御家内様、御連中様へも可然御心得頼上候。野生事恙なく菊月七日東都着杖いたし候。扱は御やくそくの信我宗匠筆のもの二葉御送り申上候。来三月末ころまでハたしかに在府いたし居申候間其うちもしく御出府も被成候ハ、御尋ね相待居申候。此ふミ届き次第御返書待入まいらせ候。其節又々日本のかわら摺の御



短き被下候へかし。信我師へも遣し申度候。何も又々申上候。

一 素風女⁽³⁾へ御便りのセツ文ましに御つたへ被下候。先ハ折からの御礼用事のミあらく申上候。可祝。

菊月未 菊舎

雲帯雅兄

重陽

おふしたてゝたのしめる人にはおよハすなから草の枕に佳節を
寿くもまたおかしからむか

野ゝ分は我ものにしてけふの菊
そよきかれた薄に広しのちの月

なと申候。御笑ひ草ながら机上にあり合のまゝ御めにつけ候。かし
く。

註

(1) 信我。江戸の俳人。美濃派宗匠白寿坊の別号。菊舎の兄弟子。
ともに傘狂門人である。本名野村安長。道元居、弄花等と号し
た。文化十四年六月十六日没。

(2) 御短ぎく。雲帯は太宰府都府楼の古瓦の模様を刷りこんだ短冊
を所持しており諸方へ贈っている。九州旅行中に得たものか。

文中「日本」は「日外」とも読める。

(3) 素風女。長野県埴科郡戸倉町の俳人。加舎白雄門人。三隅亭の
号がある。

B 野村白寿坊書簡

一簡致啓上候。此節朝夕寒冷相催候得共弥く御清栄被成御務万
福之至被存候。将初春望之貴簡如月廿日落手忝薰誦御丁寧之御楮上
ことに御歳祝・春興之玉句拝吟感舌仕候。其上風流之短尺⁽¹⁾数葉御恵
贈被下遠路御厚志之段不存寄賜千万忝奉存候。右御礼答早卒可申進

筈之處眼前差かゝり之雅用ニ紛乱寸筈以之外、遅引之段御海容可被下候。菊舎も三月上旬武陵⁽²⁾発杖、今以京師遊歴仕候趣ニ相聞へ申候。随分堅固ニ遊候間御安慮可被遣候。余り乍延引右御礼得貴意のミ。荒々呈寸書候。頓首。

初冬八日

白寿坊(花押)

雲帯様

几下

晴よとは誰もいのらす初時雨

落葉セすは見つけしものを帰り花

右申捨候。貴便被下たく候。

註

(1)短尺。菊舎尼書簡註2参照。

(2)武陵。江戸。

Aの菊舎尼書簡は九月末日江戸より発信、来年三月末まで江戸滞在の予定を伝えている。Bの白寿坊書簡中にもA同様古瓦模様の短冊の記事がみえるほか、菊舎尼の江戸退去を三月上旬としているので右二通の書簡は年をまたがっているもののほとんど同時期に書かれたものであることがわかる。

二書簡の発信時については後に項を改めるが、とりあえずこの書簡から判明する菊舎尼の動向を整理してみよう。

1 菊舎尼は秋に上田を訪れ「ふしぎの御風縁」により雲帯宅に宿泊、「百とせもなじみのこゝちにへだてなく御かたらひ数々御信セツなる御取持」にあずかった(A)。

2 上田出立後その年の九月七日江戸に到着した(A)。

3 雲帯から白寿坊の筆蹟(短冊であろう)入手の依頼をうけ、九月末日便(書簡A)に約束通り同封した(A)。

4 菊舎尼は当初翌年三月末頃まで江戸に滞在する予定であった(A)。

5 雲帯から古瓦模様入りの白短冊をもらったが、さらに白寿坊にも進呈したいから追便の節送ってほしい旨を依頼した(A)。雲帯は翌年一月十五日直接白寿坊にこの短冊を送っている(B)。

6 信州遊歴中、埴科郡戸倉町の素風とも対面、風交をしている(A)。

7 菊舎尼はA便を出した翌年三月上旬江戸を去り、京都に滞在、十月頃もなお京都にいる(B)。

菊舎尼が上田に来たのは当初特定の俳人を訪れる目的はなく、おそらく江戸への道すがらたち寄った程度であろう。由来上田は加舎白雄の出身地で明和以来この春秋庵派俳諧の強固な地盤であった。寛政以降派閥がゆるみ俳壇の一本化が進みはじめてもいっこうに美濃派俳諧はいらなかった。信州で美濃派の行われたのは、木曾、松本、安曇といった中、南信地方が中心で、もともと東、中信地方とは縁がうすかったのである。上田訪問以前の菊舎尼が雲帯の存在を知っていたかどうかはわからないが、雲帯は白雄門下でありながら遊俳の常としてかなり自由に諸派と交遊していた。特に筆蹟を蒐集する趣味があり、俳系の如何、有名無名を問わず、あらゆる俳人たちの筆蹟を全国的に蒐集していた。それは書簡A(白寿坊の筆蹟無心)からもうかがえるところである。また有名、無名自分を訪れる俳人があるところよくこれに応接し、数泊させることも珍しくなかった。雲帯宛て俳人書簡の何割かは、これらの雲帯の世話にあずかった行脚俳人たちの礼状で占められている。彼らの俳系は特に春秋庵派に限定されない。俳諧が社交の具と化した後期俳諧の顕著な例がやはりこの雲帯にも認められるのである。

菊舎尼と雲帯がいかなる縁で対面したかはわからないが、上田に至る以前戸倉町の素風に対面していたとするならば、おそらく同門の關係にあたる素風の紹介によるものであろう。また、素風の紹介がなくともこの希有な女流行脚俳人の存在は家を出ることの少なかった旦那俳人雲帯の興味をひくに十分であつたはずである。

いずれにせよ「ふしぎの御風縁」によつて雲帯宅に宿泊を許された菊舎尼は雲帯の旧知のようなあついてもなしにあづかつた。書簡Aに「御連中様へも可然御心得頼上候。」とあるところをみると近隣の俳友岡崎如毛や荒井三机、同争茂、小島麦二、同玉馬、斎藤井々、同芳洲などと呼ばれて、歌仙の一卷も巻かれた様子である。この手紙以外、目下のところ成沢家その他上田連中の子孫宅から菊舎尼一座の懷紙や短冊などは見出せないが、今後発見される可能性は大にある。

戸倉の素風ははじめ同地の白井鳥醉門人宮本柴雨に俳諧の手ほどきをうけ、その十竹窓連の一員であつた。白雄の師松露庵鳥明の『松露庵歳旦』（明和六年刊）への出句が最も早く、やがて白雄門下に移り三隅亭の号を得ている。いつの頃か白雄もこの人を訪問、蕎麦のもてなしをうけ、

女夫すずし我腸をよくしりて 白雄（白雄贈答）

と詠んだ。白雄は美食漢で特に蕎麦には目がなかつた。

素風の作品は管見によれば『田舎』のほかに『白雄編。明和八年刊』のほかに『蓑のうち』（鳥明編。安永元年刊）『俳諧古にし夢』（鳥明、柳美編・安永二年刊）『俳諧俗表紙』（其明編、白雄後見。安永二年刊）『春秋稿』初（白雄編。安永九年刊）―五編（同編。天明五年刊）までの各編に出句するほか『はるの音づれ』（白雄編。寛政二年刊）という白雄最晩年の撰集にも出句するから白雄門

の古参俳人の一人である。寛政期のうちに他界しているらしく、以後すべての俳書から姿を消している。菊舎尼とは同じ女流という点で互いにひかれるところがあつたのだろうか。

三 上田訪問は寛政五年秋

さてこれら貴重な内容を含む二書簡はいつたい何時発信されたものであろうか。

ここで問題になるのは二書簡中にみえる菊舎尼の江戸滞在である。菊舎尼が生涯のうち江戸に滞在したのは次の二回のみである。

一 天明元年（一七八一）十二月から天明四年（一七八四）五月まで。

二 寛政五年（一七九三）秋。

初回の滞在は、既に述べた安永九年（一七八〇）晩夏長門出立、諸国遊歴の末、翌天明元年十二月奥羽地方から江戸に帰着した事実をさす。この旅の詳細は代表作『手折菊』によつて確認される。途中天明元年六月越後から信州にも足をのぼしているが、その目的は歌枕姨捨を見物することであり、上田には立ち寄っていない。この姨捨訪問部分は同書のクライマックスの一つでもある。^{（註4）}

姨捨山にて花には花笠の面影を尽し、月には竹笠の佗姿お亦おかし。善光寺を拝せしより此更科の月にひかれて、わけ登るも唯ひとり、頃は水無月中のひと日、入相聞る時なれば、いでそや月を詠めんと、其まゝに山に仮寝して

姨石をちからに更て月すゞし

山に登りて小夜更るまで月をながめしが、十分の詠めもたらぬに、俄に空はためき、いたく大雨降り、神鳴、いなびかり甚しく、高深陵谷の大変事にて、あたりの山さへ崩れ出、己が命も寸前に失

はんとおもふ程からければ、とある岩のはざまに這寄て身をちぢめ、一心即滅と念じ居るうち、漸々夜明になりぬ。爰に伝五郎といへる人有。夫婦の心ばへいとやさしく、情しるものなり。前宵我ひとり山に登りしを、麓に田業せし折から見かけ置しが、いかなるよるべの夙縁にや、終夜烈しき風雨ゆへ案ずるばかり、いも寝ざりしとて尋ね来り、且悦びかついたはり連て、おのれが家に帰り介抱す。此時の命ののぼはりしは、全く彼夫婦の情深きゆへなり。

姨捨た里にやさしやほとゝぎす

再び関山を越て、越後路へ帰る。

よし無住であつたとしても当時長楽寺があつたのだから岩（姨石か）のはざまに這寄て夜を明かしたというのはやや誇張に過ぎるようだ。しかしそれも、棄老説話の地姨捨山にふさわしい文学的表現であり、いま虚構を云々してもしかたがない。

右の一文からもわかるとおり、姨捨訪問は夏のことで書簡Aの秋とは季節が異なる。したがつて菊舎尼の上田訪問は寛政五年秋の可能性が高い。

寛政五年の江戸滞在については『手折菊』三風の巻巻頭に「分手の吟」と題する白寿坊の送別文があり、これによつてその大よそが判明する。

分手の吟

○会者定離の世のならひはさる事ながら、逢ふ時はよろこび、わかるゝ節はうらむこそわりなき人情の今日なるべし。長府なる菊舎尼は十とせ余り先ならむ東武に遊歴の折から草廬に三とせの因をむすびて、後再遊を待兼侍りしに、去年の秋より錫を留て、一日三秋の恨みもはれしが、雁さへ帰る空に誘はれ、俄に帰発の杖笠をとらるるより、残情更に比らぶるものなけれど、生涯海内を経回せむと

の、其機鋒をたのしみつゝ、亦の来杖を心ぢからに、離盆を催し、互ひの堅固をいのりくゝて、

わすれずに又来て遊べ八重桜 道元居 白寿坊

註

(1) 東武に遊歴。天明元年十二月初回の江戸訪問。

(2) 去年の秋より……。『寛政五年（四十一歳）の秋菊舎は再び江戸に遊んだ。白寿坊は十年前の時と同じやうに何くれと温かく面倒をみてくれた事であらう。作左衛門老人もみづから七絃琴を造つて珍客に与へ、薩摩の藩士菊地東元に就いてこれを学ばしめた。越えて六年の春、咲きさかる花の頃に江戸を立ち、彼の琴を抱いて海道を上り、行く行く五十三次を画題にしては俳句をつけた。』（『二字庵菊舎尼評伝』——『菊舎尼俳句全集』所収）

白寿坊が記す二回目の江戸滞在は、秋にはじまり翌年の秋に終わつており、書簡ABの記事と完全に一致する。したがつて上田に雲帯を訪れたのは寛政五年秋、江戸に入る前のことであつたことがわかる。

長門から信州戸倉、上田への経路はいろいろ想定されるが「野生事恙なく菊月七日東都着杖」（A）から考えると、まず東海道經由は除外してよいであろう。残るは北陸路を越後から入ったか、中山道のいずれかだが、より無難なコースはむろん後者である。戸倉町の素風との交渉は、あるいは天明元年の姨捨訪問が忘れがたく、再び清光の美しい秋季に同地を訪れた事実を証すものかもしれない。姨捨は素風の住む戸倉町の隣接地で徒歩でも一時間ほどの至近距離である。

今日明らかにされている菊舎尼の二度目の東下に関する資料は先に紹介した白寿坊の「分手の吟」ぐらいでどのようなコースでいつ

江戸についたか明らかではなかった。しかし、書簡Aの出現によって秋季の信州戸倉、上田での風交、九月七日江戸到着の事実が明らかになった。

本稿をきっかけに上田、戸倉地方からこの折の菊舎尼の資料が発掘されることを期待している。

本稿をまとめるにあたり所蔵者成沢宇一郎氏、泉允子氏のお世話になった。記して感謝する。

註

註1 後藤憲二編『俳人の手紙』（日本書誌学大系68・平成五年九月刊。青裳堂書店）所収。

註2 川田順編著『菊舎尼俳句全集』（昭和十二年七月刊。沙羅書店）

註3 二書簡の写真は矢羽編『読俳人の手紙 附一枚刷図版』（日本書誌学大系71・平成七年六月刊。青裳堂書店）に掲載。

註4 以下『手折菊』の記事はすべて『菊舎尼俳句全集』による。